勢山文書 ⑧「おさしづ」の写し翻刻

天理教一広分教会長
安井　幹夫　*Mikio Yasui*

（カ）明治廿八年十二月十三日　本部北浦地ならし願
さあ〳〵尋る処　事情おい〳〵よりあつまり処　どうもせもふてならんといふ　どうなりこうなり」（9オ）
そこ〳〵はじめかけたる　一時以て尋る処　それハぼつ〳〵にかゝれ　かゝらにやならん　なんどきたぶん人がどれだけ　人がよるともわからんで　これも一寸はなしておく　そこい〳〵一寸でかけたる　それハ十分になりし　一寸これだけといふハかしこいもせにやならん　それでだん〳〵　また尋るならおもふよふになる　地ならし　それ〳〵こふしておこふといふだけハゆるしおこふ
（注）明治 28 年 12 月 16 日　本部の大裏地所土均らし願

（キ）明治廿九年三月十三日　旧正月廿九日」（9ウ）
各下教会二於テ教祖様十年祭執行仕度御願
付テハ御霊を広キ場所へ御移シ件御願
さあ〳〵尋る処〳〵　処々にハ皆心があろふ　心ハうつしてある　地所せまい処ハとりあつかいでけるよふにせにやならん　ほんの心たげつとめてくれ　また一ツさとしておく処によりてハ　かけだしもせつやなろふまい　それハ心の里だけにゆるしおこふ　心だけうつすのやで　日げんの処もはやいおそいハない
　御霊御移しの事情
さあ〳〵心だけうつす　日げんの事情　さあ〳〵」（10オ）
もふ一度のはなしに　ゆるしおくから　それ〳〵の事情　にちげんはやいおそいハない　たいそふハいらん　心だけうけとるのやで
（注）明治 29 年 3 月 13 日　各部内分支教会に於て教祖十年祭の節広き場所へ御遷りの願

（ク）明治廿九年三月廿四日　夜二時半刻限
びつくりしなよ〳〵　びッくりする事でけるで〳〵　あちらへつれていね〳〵　こちらへいの〳〵　こちらへいねで　水を一ぱいくむ　かじをとるものもないのが　あらいもふなあーことはなししておく　いつもおなじよふに　おもふていたらちがふて　思ふよふにならんから　はなしハ一寸ともさゝん　くさばの中から」（11ウ）
とふりこしたものなら　一日の日もまたずして　まんぞくあたへてこそ　三十年のこふがある　もふこれだけいふたら　なにもゆわん　どことも身上せまりきつてある〳〵　どうもならんあとでこふかいないよふに　一時でハない　今までこんなはなしハない　今までのはなし　なにもこふがのふて　つぶれてきたなれど　一寸おわりはなしがこふになるかもわからん　あす日から席や〳〵とかならずいふてくれな　いふ里ならいふだけの　たのしみをつけてから　はこばせ　かつてのよい時にハぢふだいのにをおわせ　また〳〵はなしせんや　其まゝたのしみ」（12オ）
の道をはこぶなら　また〳〵はなしもせんやないといふ　くきているものも　かやさにやならん　こふいふたら　一日やない一時ノあいだもまたんで
　押して願
さあ〳〵まんすじのいとでも　口ハートすじといふ里をきかすまんすじのいとでも　一口の里を聞訳るなら　どんな事も口があくやろ　あいたら里がわかるやろ　口にいふ里を聞訳るならみんないとになる　口といふハ二ツも三ツもない　はよふにもいふたる　一寸とかゝりに教会といふ　あちらにも本部や〳〵こちらにも本部や　にせや〳〵　本部や〳〵といふなれど　これも今迄ハ」（12ウ）
よふ〳〵一ツの里にあつまりたやろ　是からはなしするから　しつかり聞訳　もふさしづとめよふかと思ふている　もちいんさしづならしても　何のやくにもたゝまい　さしづハ人間の心ですると思ふ心がちがふ　心があわんから　うたがわんならんどこのものもかしこのものもいる　どういふているのぞ　此里がわかりたら　それまんすじの糸の里がてでくるやろ　よいとわるいとのさしづをとつて　かつてのよいさしづハもちいるなれど　かつてのわるいさしづハつぶしてあいまふ　これが第一ざんねんでならん　これがどうもならんだいである　だいの咄も（13オ）
しておこふ　けつまずくだいにもなるやろ　ないやろと思ふているものがけつまずく　心にもつて通るものハ　けつまづかん皆一寸のむしも五分のたましいと皆いふたる　人間と〳〵どふこふいふならさしづハいらんもの　これだけさとしたら　皆わかる　けふにけふきても処のち住職ぐらいでける　住職といふハほんのその処にいるといふだけの者やないか　こゝにいるといふ　しるしだけや　それに三十よの道すがら　てりあわしてみよ　男女にハよらんといふてある　心だいでどこまでといふたる〳〵　それみなつぶしてある　是もかつての道とふるから　どん」（13ウ）
ならんこれ十年祭〳〵といふて　つめいんや本部員や　処〳〵国〳〵まちかねた　十年祭もよふ勤めてくれた〳〵　十年祭もといふて　いさゝかの者でものぞきあるいても　それたつた壹人をたよりにしたもの　とふばんといふハ　こふいふ時のとふばん　もの〳〵の時に　とふばんもなく　もふなす日から　とふばんハいらん　すつきりいらん　此里をこたゑよ　十年祭にせき〳〵といふて　あちらこちら　これだけにんたいハないといふてくれたから納りたもの　だれハけふハ　どふしなさつたかといふて　尋ねてくれたものハない　どふもこれハ三十年」（14オ）
ぜん〳〵よりつれてきた里が　おさめるにおさめられん　もふそこで　とふばんもいらん　なんまんともかへるものが　なんでもないもの　ほんの口さきでといているのも　おなじ事やもふこれですつきりなんにもいふな〳〵　もふゑらいわ〳〵あすからおもふ処へあすぶがよい　あすべ〳〵
（注）明治 29 年 3 月 24 日　夜十二時半　刻限（教祖十年祭の後にて別席四五千人程もあり本席五六百人もある時、七日間本席御休みになりし時の事情）